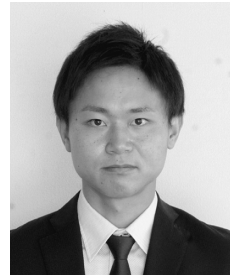


私の工夫

「くずす」がおもしろい！
ハンドボール
〜挑戦課題にもとづいた授業づくり〜

総社市立常盤小学校

教諭 村瀬 遼平



1 はじめに

学習指導要領においてボール運動領域は、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」という攻守の特徴から、内容と技能が示されている。バスケットボールやハンドボールは、「ゴール型」の例として示されているが、今までの実践では、ボールの大きさとシュートの仕方（リングにシュートかゴールにシュート）の違いと捉えて指導することが多かった。今回は、バスケットボールとの差を詳細に分析しながら、パス・ドリブル・シュートなどの動きが、ハンドボールというゲームの中でどのような意味を持つのかということと、ハンドボールは何に挑戦する運動かということを明確にした授業づくりを行った。

2 指導者の意図

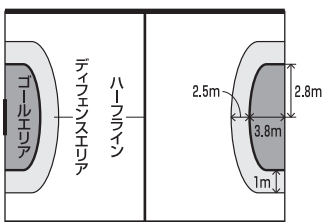
(1) ハンドボールは何がおもしろいのか

ハンドボールは、パス・ドリブル・ポストプレーなど様々なボール操作や動きをしながら攻防するゲームである。一見、バスケットボールとよく似たゲームのように思えるが、ハンドボールはゴールエリアライン前にスペースをなくすようにして守る（シュートを打たれないようにする）ことが特徴である。フリーになるようにシュートチャンスを作るバスケットボールに対し、スペースを取ってシュートチャンスを作るのがハンドボールにおける攻防の特徴となる。そこで、挑戦課題を「ボールを運んだりスペースをつくったりしながらシュートを決めることができるかどうか」と設定し、ゴール前でのスペースをめぐる攻防をいかにしていくのかを学習の中心として授業

【表 ルール】

<ul style="list-style-type: none"> 引いて守る、いわゆるゾーンディフェンスになるように、2時間目以降「守りはディフェンスエリア内を移動してシュートを防ぐ」（図1参照）とした。 速攻だけで完結せず、攻撃の組み立てができるように、「ハーフラインまではカットされない」「全員がハーフラインを越えたらシュートすることができる」とした。
<p>＜その他の基本的なルール＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 1チーム5人、1試合4分 ゴールエリア内ではキーパーはドリブルやパスを使用可、ボールを持って4歩まで歩くことができる。

【図 コート図】



1時目	2時目	3時目	4時目	5時目	6時目	7時目	8時目
挑戦課題：ボールを運んだりスペースをつくったりしながらシュートを決めることができるかどうか							
<p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> 挑戦課題の確認 試しのゲーム 	<p>【問い】</p> <p>どのようにディフェンスを組めば失点を少なくすることができるかな？</p> <p>・失点の少ないチームの勝ち ・各チーム持ち点制(10点)</p>	<p>【問い】</p> <p>どのようにスペースを使えばシュートを決めることができるかな？</p> <p>・得点の多いチームの勝ち</p>	<p>【問い】</p> <p>どのようにスペースをつくれれば、シュートを決めることができるかな？</p> <p>・得点の多いチームの勝ち</p>				

すると子どもたちは、パスやドリブル、シュートなどが「ゴール前までボールを運ぶこと」「ディフェンスをくずすこと」「シュートを決めること」に使われているゲームであることに気づいた。そこで、挑戦課題を「ボールを運んだりスペースをつくったりしながらシュートを決めることができるかどうか」であることを確認し共有した。

今回紹介するのは、6年生での実践である。

3 実践の紹介

提示したものである。このこと共有に加え「問い」を投げかけ、課題解決のための視点を与えた。

(2) 指導計画・ルールの工夫

を展開した。ここでいう「挑戦課題」とはゲーム中に、どのようなことをやりとりしているのかを児童にもわかりやすく

提示したものである。このこと共有に加え「問い」を投げかけ、課題解決のための視点を与えた。



その際に、ディフェンスをくずす場面に多くの時間をさいていることに気づいた児童が多かったため、ゲームの特徴として押さえておいた。しかし、その後行った試しのゲームでは、ボールにつられてしまい、遊ぶ場面ばかりに目が向いていた。また、失点が多かったこともあり、子どもたちの意識はディフェンスに向くこととなった。

〈2・3時間目〉

多くのチームが、人を決めて守るいわゆる「マンツーマンディフェンス」を試していた。一人一人が相手を決めて守るため、時にはボールを持つている人につられたり、ディフェンスエリア内で守りが一カ所に集まったりして、シュートを決められるスペースが簡単にできてしまっていた。そこで、「相手がシュートできるスペースをなくすには、どこで守れば効果的かな」と発問したところ、ゴールエリア前のスペースをなくすようにチームで連携して

守ることが大切であると気づいていた。そこから次第に、守り方が「一人で守る」から「みんなで守る」へと変容していき、チームの一人一人が役割をもって、スペースをなくすディフェンスをするようになっていった。

〈4・5時間目〉

前時までの学びによってディフェンスが上達したことで、簡単にシュートが決まらない状況となった。そこで、4時間目以降は、子どもたちがディフェンスをどのようにくずすのかを考えていくこととなった。

問いを投げかけると、子どもたちの意識は、サイドやゴール前のスペースを使うことに向いていった。しかし、子どもたちはサイドやゴール前のスペースを使うことは考えていたものの、そのスペースを工夫して使うまでには至っていなかった。そこで、サイドやゴール前のスペースをより効果的に使うにはどうすればよいかに目を向けるようにした。そうすると、子どもたちは、視聴していた映像をもとに、個の技術であるサイドからの倒れこみシュートやチームの技術であるサイドチェンジなどを工夫するようになった。

さらに、ディフェンス面においても、自分たちがオフフェンスで考えた動きを手がかりに、工夫していく姿

が見られた。

〈6・7・8時間目〉

4・5時間目で、オフフェンスの使用できるスペースがさらに少なくなってきたため、6時間目以降では、スペースを「使う」ことから「つくる」ことへと、子どもたちの課題が変わっていった。

あるチームは、ボール保持者がディフェンスエリアに切り込むことで、ディフェンスを引き付けてスペースをつくることを考え、ディフェンスエリアへの切り込み方を工夫していた。

他にも、ボールを持っていない人がディフェンスエリアに入り込み、ディフェンスをうまくブロックして、シュートできるスペースをつくり出すチームも見られた。

次第に子どもたちは、プレー中に「切り込み!」「ブロック!」といった短い言葉で連携していくようになった。このことで、子どもたちは考えた一つの動きばかりにこだわってプレーするのではなく、状況に応じてながら、一人一人が役割をもって「くずす」動きを追求していくことが可能になったと考えられる。

4 おわりに

挑戦課題にもとづいたハンドボー

ルの授業実践から、様々なことを学ぶことができた。私自身は、まだまだ体育の授業を十分に研究できていない。教師の意図だけを優先させたり、子どもたちの発言を十分に読み取ることができず、意味を取り間違えたりしたこともあった。

しかし、子どもたちは挑戦課題に向かって、問いに対するチームのめあてと、チームのめあてに対する個人のめあてをもち、一人一人が役割をもって活動していた。同じ課題を共有しているからこそ、ゲーム中でも状況に応じた意味のある声かけが行われ、ボール運動が得意な子どもも苦手な子どもも連携しながら「くずす」動きを追求し続けていけたのだと思う。迷ったときに、挑戦課題に戻ること、授業の方向性がぶれずに進めたことは成果であったと思う。今後は、他の単元などでも挑戦課題をもとに子どもたちと一緒に考える授業づくりを、私も自身も試行錯誤しながら取り組んでいきたい。

